

市民文教常任委員会会議記録（概要）

平成29年4月18日（火）

開 会 （午前10時0分）

【議 事】

○特定事件「市民文化について」

・文化芸術振興ビジョン素案について

植竹委員長

事前に配付した資料について、傍聴者にも配付してよろしいか。

（委員了承）

配付した資料は、回収することよろしいか。

（委員了承）

【概要説明】

吉田文化芸術  
振興課長

文化芸術振興ビジョンの策定までの背景・経過・目的について説明させていただきます。

まず、文化芸術振興ビジョン策定の背景には、所沢市が文化都市であり、文化の殿堂・ミューズを抱えているといった現況にあって、その下支えになるものがなかったという非常に大きな要素があります。実際には、平成8年に文化振興指針をつくっておりますが、文化芸術といったカテゴリーにおさまらずに、当時、「行政の文化化」ということで大半が市の職員のあり方やそういったことにだんだんシフトしていく内容になっていまして、現状になじまないようなものとして、忘れ去られた

ような状況になっておりました。平成13年には、文化芸術振興基本法が施行されました。国や自治体は「文化芸術活動を行う者の自主性を尊重し、文化芸術振興に関する施策実施の責務を有する」とあります。これを受けて各自治体等で文化施策計画を立てたり、ビジョンをつくったりといった動きが始まったと考えております。これに加えて現在は、COOL JAPAN FOREST構想のような民間企業による文化的な開発が入ってきました。また、私ども市の関係で申し上げます、文化の専門のセクションがございませんでした。こういった状況にあったかといえば、教育委員会の中に文化係があり、あるいはミューズの管理は以前のコミュニティ推進課、現在の地域づくり推進課が所管をしておりました。これらに入らないものを企画総務課が受け持ち、3つの担当に大きく分かれていた状況がありましたが、これをまとめて2年前の4月に文化芸術振興課ができて、文化面を一括して所管することになりました。こうしたことがきっかけになって、あらためて文化芸術振興ビジョンをつくろうとなったものでございます。

策定に当たっては、現状における総合計画・上位計画等をしっかりと踏まえ、また現在の市長の公約（5つの思い＋1）とも整合させながら、内容については、その論拠や経過等も含めて記述しているものでございます。

ビジョンの目的について申し上げますと、今現在の事細かな文化活動、あるいは目指すべき文化というよりも、中長期的な未来、10年後

20年後の所沢の文化のあり方を描くようになっております。また、現在の地域特性や市民感覚を整理して、基本理念、取り組みの方向性を示しています。

策定後には、ただつくったのではなくて、しっかりと活用されるようなもの、それによって施策が展開できるようなものにしていきたいと考えております。

今回のビジョンは、現在抱える問題点もしっかりと明記しております。将来に向けて4つの課題ということで、所沢市の抱えている問題点をしっかりと踏まえたうえで策定を始めました。例えば、地勢・風土の利活用。これは東京都内からのアクセスのよさというものが、急行で20分、30分ということで語られることが多いのですが、これはメリットとしてとることもあれば、都内でなんでも見ることができる、聞くことができるということで、足を向こうに運ばれてしまう場所でもあると言えます。ですので、所沢の郊外型で、みどり豊かな風土というもののアクセスの良さをプラスとして考えていかなければならないということをお願いしました。文化の拠点のあり方、これはまさにミュージズのことです。ミュージズについては文化の殿堂として全国に名だたる施設ですが、その現況として、改修のこともふまえてミュージズのあり方も考えていかなければならない。世代間・価値観格差ということについては、現在市内で行われている文化のイベント等を見ますと、非常に来場者の高齢化が進んでいる状況で、まちづくりセンター等の活動についても、

やはり高齢化が進んでいるのですが、では若者が何もやっていないかというところ、そうではなくて、しっかりと文化活動をやっています。ただ、やりかたが以前と違って、インターネットや同人的な集まりでなんとか進んでいて、そういったところで格差が生じているのではないかというところ、目を向けまして、ではどうすればよいのかということももうたいこみました。都市PRの文化戦略、これはブランドの関係です。所沢を文化、音楽やその他いろんなものでPRしていくために、こういった戦略をたてていったらよいかということをおうたっております。

これらの問題というのは所沢市に限ったことではありませんが、今回しっかりと着目して、おざなりにすることなく、そこからテーマ化して、進めていったということがございます。

また、所沢市だけで、このビジョンが成り立つかということについても、着目しました。武蔵野の文化圏、首都圏からのアクセスの関係で、同じ文化をもっているエリアについて、わかりやすくいえば、ダイヤプランの4市であったり、あるいは埼玉県南西部という言われ方をしたり、三多摩地区という言われ方をしたり、そういった近隣のエリアについては同じような文化をもっているのではないかということで、今後協力していくための布石としてうたいこんでおります。

後半にはビジョンを用いて、こういった方向を見出していけばよいかということで、取り組みのヒントをうたっております。これは個別具体的な計画や事業を示すということではなくて、今やっている事業は、こ

ういうものがありますよ、これからこんなことをやるのはどうでしょう、というようなヒント・提案というかたちで明記しております。このビジョンはコンサルに委託することなく、若手職員の意見をベースにして、検討を始めました。そこでワーキンググループというかたちで始めたのですが、そこで出てきた意見については、今後の所沢にこういう希望を持っているということで、なるべく活かしたいと思いましたので、それらをこういう例示があります、ということで活かしております。

そして今回の目指すところ、目的ということになりますけども、「所沢ニュー・サバービア宣言」としてまとめております。サバービアという言葉はアメリカで80年代に使われたもので、都市の空洞化とともに語られ、郊外に家を建てて、移り住もうという理想郷のようなイメージで始まっています。うまくいったかという、いろいろな評価があります。郊外型の都市圏というのをうまく使おうということでニュー・サバービア、新しい文化圏をつくろうという内容になっております。これにつきましては所沢の立地の特性を生かした宣言になります。都市機能がきちんと根づいたものがあって、首都圏からアクセスが非常によいにも関わらず、豊かな自然が残っていて、加えて個々の時間をくつろげるような癒しの時間を過ごせたらいい。かけあわせて、満足感や至福感が得られるのではないか、という定義でございます。新たな郊外での暮らし方の提案になっております。

時期的なことと言いますと、今年の7月、8月ぐらいに成果品を公表で

きるよう目指しております。その際には、所沢が今までもっていた文化資源、例えば著名人や伝統芸能や最近のアニメの隆盛、これらをデータベース化して、別冊としてつけくわえようと考えております。

古田文化芸術  
振興課副主幹

それでは、文化芸術振興ビジョンの策定経過及び今後の予定についてご説明します。

ビジョン策定の体制につきましては、平成27年10月に市内の関係課職員で構成するビジョン市内検討委員会と実務的な作業を担う市内公募職員で構成するワーキンググループ委員会を設置し、これまで準備を進めてまいりました。平成28年度においては、それらの委員会に加え、文化芸術の各分野から意見を聴くことを目的といたしまして、所沢市文化芸術振興ビジョンアドバイザーを設置し、ビジョンの策定に必要な事項に係る助言及び指導を仰ぎながら策定を進めてまいりました。

それらと並行して、平成27年度においては、2,040名を対象とした市民アンケート調査、新潟県新潟市への先進地調査などをおこなってまいりました。

平成28年度においては、市民の方から直接意見を聞く機会を複数設けて、7月に「文化芸術に関する市民意見交換会」をテーマごとに分けて、2日間実施いたしました。11月には、2部構成で「文化芸術シンポジウム」を実施し、1部には建築家、隈研吾氏の基調講演を行い、2部には、「これからの文化芸術に欠かさざるテーマ」について3つの会場に分かれてパネルディスカッションを行いました。2月にはパブリ

ックコメント手続を実施いたしました。

平成29年度においては、8月を目安として、「文化芸術振興ビジョン」を策定し、冊子1,000部、概要版1万部を発行する予定です。その後、(仮称)所沢市文化芸術振興審議会を設置し、学識経験者や市民等の意見も伺いながら、ビジョンの方向性に沿った新たな文化芸術施策を探究していくとともに、ビジョンの進行状況の検証などを進めてまいりたいと思います。なお、審議会設置のため、市議会に条例制定の提案を予定しております。

つづきまして、文化芸術振興ビジョン(案)の内容について説明させていただきます。

まず、第1部では、「文化芸術Sceneの現在を明らかにする」というテーマでまとめました。その中で「所沢市の文化的特性」として、「恵まれた文化資源」、「多彩な人材・企業・団体」があることを紹介しました。併せて、市制施行後から現在までの所沢における文化芸術活動の歴史及び今後の課題についても記述しました。

次に第2部では、「未来の文化芸術Fieldを描く」というテーマでまとめました。その中では、将来に向けた問題点を「所沢市の文化芸術に欠かさざる4つの視点」として提起し、行政にとって対応しきれていない部分も含みながら、潜在的課題をあえて顕在化させ、議論の中心に据えながら、所沢市の20年後の未来像を描いております。

後段には、「所沢ニュー・サバービア」の提案という聞きなれないワ

ードも出てまいりますが、「新たな郊外での暮らし方」という意味で、文化芸術の枠を超えて、東京から30キロメートル圏内にあり、都市機能を有しながら、豊かな自然に恵まれ、市民それぞれの生活、時間感覚の中で、新たなライフスタイルの提案をしているのが特徴となっております。

次に第3部では、基本理念である「みどりと文化・人とゆとりのまちづくり ～『所沢ニュー・サバービア』宣言～」のもとに、「文化を楽しむ」「文化で魅せる」「文化をつむぐ」の3つの基本方針を示し、体系的整理を行っております。

また、ビジョンという方向づけに留まらず、「実現に向けた事業施策」、「取り組みのイメージ」、「今後の取り組みのヒント」など実践的な具体事業案を包括しているのも特徴となっております。

また、後述には、「ビジョンの推進体制」、「ビジョンの推進状況の検証体制」なども記述しております。

文化芸術振興ビジョン（案）の内容説明については以上です。

### 【質 疑】

石本委員

ミュージズの今後の具体的方向性について、会場使用料以外の収益の増加を図る事業とは何か。

吉田文化芸術

振興課長

会場使用料以外の収益の増加を図っていくことは、大切な視点だと考えております。今後は、ミュージズを運営しております指定管理者に経営努力



を促してまいりたいと考えております。

石本委員

課題について、市民アンケート調査で本当に若者・子育て世代のターゲットをつかめると思っているのか。

吉田文化芸術

市民アンケート調査だけで、若者・子育て世代のターゲットをつかめる

振興課長

とは思っておりません。今後は、アンケートに加えて若者・子育て世代が集まるような催しの場での情報収集やSNSを活用する等、ニーズを把握してまいりたいと考えております。

石本委員

ポートランドに職員は行ったことがあるのか。

吉田文化芸術

ございません。

振興課長

石本委員

ポートランドは世界各地から目指される街だが、本当に所沢が目指していけると考えているのか。

ポートランドのような街だと農地転用などが規制されるようなイメージがあるが、市長はポートランドの街を目指しているのか。

吉田文化芸術

都市の規模、恵まれた自然環境、教育機関の存在といった類似する要素

振興課長 が多々ございます。なおかつ世界的に見ても理想とされるまちづくりという意味で掲げているものです。

小林委員 文化芸術について共通認識にするために、ジャンルを網羅することについて伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長 今回のビジョンにおいて、所沢にかかわる文化を論拠するために必要なものについては触れております。すべてのジャンルを網羅しているというところまでは至っておりません。ビジョンでは所沢の文化特性を加味したジャンルで限られています。

小林委員 表現の自由の保障、行政の不介入の原則をいれることについて伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長 中長期的な本市の将来ビジョンということで、そういったものを取り上げるということはありません。

小林委員 国では、文化芸術振興基本法があるが、条例化している自治体名と数、所沢市としての条例について伺いたい。

吉田文化芸術 県内では、さいたま市、富士見市、川口市が文化に関する条例を制定し

振興課長

ていることを把握しております。さいたま市が平成24年、富士見市も平成24年、川口市が平成28年に条例を施行しております。将来的なことについては、今年度中に設置予定でございます文化芸術振興審議会で話し合われていく予定でございます。条例化については考えておりません。

小林委員

「市民の文化活動が活発であるまち」について、市民文化を「市民自らが個人または団体において参加、実践している文化活動」と定義づけている。個人の趣味の問題で終わっているのではないかと思う。受益者負担で練習・発表の会場費負担は重くなっている。市内まちづくりセンターの施設を活動拠点としての活動、文化祭で、ミュージズ等を会場に20以上の催しを開催しているとしているが、練習・発表の会場費助成の考えについて伺いたい。

少子高齢化や多様化する価値観の中での今後の文化芸術支援策のあり方について、例えば所沢市文化祭時に発表会を開催していた所沢市日本舞踊連盟が解散しているが、能・狂言・文楽・日本舞踊、三味線・琴・尺八など邦楽・雅楽や、ロック音楽等と、子ども劇場・音楽鑑賞団体や演劇鑑賞団体などへの市民の自主性を尊重しつつ、これらの活動の振興、支援策の考え方について伺いたい。

吉田文化芸術

これらについては昨年7月の意見交換会でも、市民の方が挙手された中にそういった内容が多くございましたが、今回のビジョンとはなじまない

振興課長

と考えております。市民の意見の中で、将来、こうしたことをやってはどうかというお考えの方もいらっしゃったので、これからの検討課題として取り上げたいと考えております。例えば、会場の確保の問題については、新たにホールをつくるとか、いつでもホールが空いているかというのは、文化活動が盛んな中で難しい問題となっています。今後のあり方としては、例えば、空き家の活用や、個々の世代がそれぞれ集まるのに対して、3世代でまとまるのもっと良いというように、柔軟な発想で問題解決に当たる必要があると考えております。

荻野委員

初めに、文化芸術振興ビジョンの実現に向けての具体的な計画の策定、目標指標の設定について伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長

ビジョンは上半期に形にして公表したいと考えています。それが終わった後に、いわゆる文化芸術振興審議会という形でビジョンの方向性や、またそれに沿った具体的な施策を探究していくという形にしていきたいと考えていますので、有識者を含めた文化芸術振興審議会において、ビジョンの進捗状況の検証や今後の計画策定の必要性などの議論を始めていきたいと考えています。

荻野委員

ビジョンに掲げられている取り組みについて、優先順位はあるのか。

吉田文化芸術  
振興課長

こちらについても、審議会の中で検討していきたいと考えておりまして、先ほどの説明において、ビジョンの後半に「今後の取り組みのヒント」というものがありました。これについては、若手職員から出されたものもあれば、今実際に行っているもの、これから行おうとするものなどが含まれております。その中からこの時勢や財政状況にあったものを取捨選択して決めていくものと考えています。

荻野委員

基金の創設など、ビジョンの実現のための財源確保策について伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長

財政事情については、非常に厳しいものがあります。文化事業については、国や県などで助成金の制度等がいくつかあり、条件を満たせばそういったものの活用ができるのかと考えています。財源の確保については、今後、積極的に取り組んでいきたいと考えております。また、ふるさと納税における基金でカテゴリーとしては文化部門というものがありますが、使途についてはいまひとつはっきりとしていない部分があり、まだ活用ができておりません。この点については、財務部等と今後話をしていく必要があると考えております。このビジョンでは、実際に市民やアーティストを含めて、所沢の文化をどう実践していくかという将来像に重点を置いて作成しております。

石原委員 文化芸術振興ビジョン策定後は、どのように具体的な事業を進めていくのか。

吉田文化芸術振興課長 所沢市文化芸術振興審議会を設置しまして、学識経験者や市民等の意見も伺いながら、ビジョンの方向性に沿った新たな文化芸術施策を探求していきたいと考えております。また、ビジョンに基づいて取り組んでいくこととなりますが、行政だけではなく市民の取り組みも含めて、ビジョンに沿って本市の文化活動が進んでいるのかを審議会は検証する役割も持つものと考えています。

石原委員 第6次総合計画策定プロセスにおける文化芸術振興ビジョンの効果・位置づけはどのようになっているのか。

吉田文化芸術振興課長 文化芸術部門については、現在までの第5次総合計画においては、教育・文化・スポーツという章に含まれておりました。文化芸術振興課が新設されたことに伴って、第6次総合計画においては、市民生活の章に含まれることが想定されています。実際に総合計画というものは、基本構想に基づいて文化芸術の今後のあるべき姿・方向性を示すものとなりますので、今後基本計画や実施計画の内容に反映していくものと考えております。

石原委員 所沢都会田舎ライフスタイルプログラムの概要と他の部署の所管となる事業で文化体験につながるような事業はどのようなものがあるのか。

吉田文化芸術振興課長 実際に都会田舎ライフスタイルプログラムについては、マチごとエコタウンで実践されておりまして、ふるさとの大切さを理解してもらうプログラムと理解しており、「みどりのふれあいウォーク」などが実際に行われているものです。環境部門以外でも、文化体験につながる事業としては、「ところざわまつり」、滝の城址で行われている「戦国滝の城まつり」、「野老澤行燈廊火」、生涯学習推進センターの「星空フェスティバル」などいくつかの所管で実践しております。こういった文化活動を積極的に取り組んでほしいことから情報共有していきたいと考えています。

石原委員 今回のビジョンで新たに文化を育成し、次世代・後世に継承するという趣旨の記載がよくみられるが、同時に今日までつむがれてきた文化を大切にし、普及させていくという点も重要であると考えてるが所管はどのように考えているか。

吉田文化芸術振興課長 まさにそのとおりだと考えていまして、未来を描くという記述に関しては、必ずその裏づけとして先人が築いてきた文化遺産や文化活動があってその上に成り立つものと考えていますので、きちんと振り返ることと未来を描くことは同レベルでやっていきたいと考えております。今後について

もそういった精神でやっていきますので、ご理解をいただければと思います。

石本委員

現実、ミュージズは所沢の文化の拠点だと思っている。議員となって10年経つが、例えば、委託料は1億円ぐらい減らしてきている。簡単に言うと約1億円減らしたということは、1億円の経営努力をしてきたということの裏返しであると思っている。ミュージズについては、会場使用料などこれ以上収益を上げることについては限界が来ていると思っている。昨年5月の閉会中審査で、ミュージズの稼働率、利用率が非常に高いということが分かっている。ビジョンの9ページでミュージズ等の公共的役割と経営感覚のバランスとあるが、ある程度、経営感覚については限界にきていると思うが、実際にどう捉えているのか。ある程度お金をかけることは仕方がないのではないか。どう考えているのか。

吉田文化芸術

振興課長

芸術公演等については、非常に集客力もあって、市民にも喜ばれている現状があると思います。一方で、お客さんがいっぱい来る事業をいっぱいやっていけばいいかという、全国的にみて、芸術性の高いものを行うことが話題となってミュージズのステータスとなることもあります。そういった興行というのは、バランス的に言うとお客さんは入りにくいものもありますが、マスコミに注目されたり、アーティストに喜ばれたりといった評価もあり、そのバランスが重要となります。要するに、興行における集



客と質の高さのバランスをとらなければならないことの難しさが一つあります。

収益を上げるといった意味においては、例えば、ミュージズとほぼ同時期にできた大阪府吹田市のメイシアターというホールがありますが、そこも一時期、やはり採算面において低迷していた時期があり、どう回復したかについては、レストラン経営を非常に成功させたという事例があります。お客さんがホールに飲食に来るようになり、そこからいい事業に足を運ぶというように、逆に広がっていったというような例です。

ミュージズにおいては、レストランが航空公園に近接しているわけですが、もっとお母さんやお子様連れが入ってもいいので、そのための工夫はこれからもできると思いますし、あるいはレストランと展示室を使って、食事や飲み物を提供するイベントなど、多角的なアプローチはまだまだ可能だと思いますし、文化芸術事業から離れたところにも改善の要素は残っていると考えております。

西沢委員

まさに市の方針として、ミュージズという文化拠点については、所沢市の税金を上げていくかという方向性ではない。所沢市の文化的なイメージを上げることによって所沢ブランドをどのように構築していくかということにつながっているということの投資的な経費を注ぎ込んでいるというイメージであると思うが、パブリックコメントにもあったが、5億円が今後の支出として適正かどうかの判断の上で、必ずしも黒字化というのは、

所沢市の文化性の高さや所沢ブランドをつくっていくことにつながっていくとは思ってなくて、多少この部分については、持ち出しでも見返りが提示できれば市民の納得が得られるのではないかと。9ページの下段に「ホールのクオリティを支える本格的な文化芸術公演」の記載があるが、こういった公演をミューズを拠点に何とか今以上に増やしていくことができなから。稼働率が高いというのは、多くの本格的な文化芸術公演が行われているという意味とは違うので、いろんな方が使っていることを稼働率は示しているのであって、むしろ当初の芸術性を高めていくことや、都市ブランドを上げていくなど、こういうところに力を入れていったらいいのではないかと思うが、これは今回のビジョンにおいてどこかに記載があるのか。

ビジョンには、「本格的な文化芸術公演や」と記載があり、集客力の高い公演、市民活動の拠点とあり、これらは目的がそれぞれ違うことから、所沢市の文化性を高めていくという部分で考えれば、集客力とか市民活動の拠点を並列的に考えていくものなのかという疑問がある。そういう意味では、文化性を高めていく狙いは、どこかに表現されているのか。

鈴木市民部長

まず、今回のビジョンは、大きな緩い将来方向を示すものであり、計画とも条例とも違うもので、ビジョンを策定したというのはそういうことだと思っています。つまり、行政機能として分散していた所沢の文化状況を一つにまとめたわけですが、ここで改めて文化活動の全体を俯瞰して見た

こととなりましたので、ビジョン策定の機会を通じて所沢の文化的な課題を洗い出し、その道筋を探っていきたいというところまでみたいな話です。今、西沢委員にお話しいただいたものは、ある種文化活動にかかわった非常に難易度の高い方程式に近いもの、つまり解決がそう簡単ではないものと思います。ミュージズという組織を振り返りますと四半世紀使っているわけですが、ここでPFI事業を行うので、いろいろと分析をかけてまいりましたが、ミュージズが抱えている要素は大変複雑でございまして、市民文化的要素以外にも、高度な芸術的価値、さらに非営利的活動的要素、これなども重層的に乗っかっている。したがって、ミュージズというものを一つの断面で切ってみても明確な答えに届かないのです。今申し上げたことは決していいわけではなく、こういう状況をよく理解したなかで、今後ミュージズが果たしていくべき経営努力的側面や、市としての「ブランディング・発信力」をどう高めていけるか。これから多くの関係者の英知をいただきながら、答えに近づいていきたいと思います。

石本委員

5億円近くお金が入っていますといったときに、市民一人に約1,500円のご負担で文化の拠点を発信してもらっているんですと、1,500円が高いか安いかはさまざまなご意見があるでしょうけれども、よくミュージズの質問が来るとよくそう答えるのですが、専門家の人たちと話すときに、例えば、他市にミュージズと同程度の施設があって、市民一人当たりいくらかぐらいこういうものにかかっているとか、そういう議論が過去にあっ

たのか、今後していくのか。

吉田文化芸術  
振興課長 今現在、調べておりませんが、今後、取り組みをしていく中で、お金の  
かけどころについては、間違いなく議論になっていくことですから、その  
際にはある程度規模の似たところを選んで調べていきたいと思えます。

入沢委員 25ページの興味がない人、興味がない意識レベルの人にどんな方策を  
される予定なのか。層としては一番多いと思うが。

吉田文化芸術  
振興課長 ビジョンが出たからというわけではないのですが、やはり所沢の文化に  
どういったものがあるのか、どういった施設があるのか、こういった情報  
は、時代が変わってSNSなどが盛んになり、逆に若年層はそういったと  
ころから情報が入ってくることが多いと聞いておりますので、情報提供は  
小まめに行っていきたいと思えます。こういった面白いものがあるんだよ  
とか、こういった感動できるものがあるんだよ、というような提案を心が  
けてまいります。

入沢委員 先ほどの説明で、埼玉県南西部で、ダイアプランや三多摩という名前が  
出たが、今後ミューズの質の高い公演をするときにはいろんなところから  
集客しなければいけない。集客面だけでないが、南西部にこだわらず、西  
武線なら練馬や東村山、東大和、武蔵村山とか広範囲にわたって考えてい

かなければならないと思うが、その辺の考え方についてはいかがか。

吉田文化芸術  
振興課長

お客さんに来てほしいという意味で考えますと、まさに沿線の要所要所にはPRしていかなければならないと思っていますので、都内から来る路線や、県内に延びている沿線を含めてミュージアムや所沢市の文化的事業をPRする価値はあるものと考えています。先ほどくくったのは既に自治体間で協力し合っている文化圏の例で、同じような文化があるのに所沢だけだというのでは少し物足りないという意味で、例えばうどんの文化圏は、所沢市だけに限ったものではないので、そういったところはひとまとめに語っていいのではないかと考えています。宣伝等についてはもう少しグローバルに行っていきたいと考えています。

入沢副委員長

例えば、お茶なんかでも東京狭山茶というものがあったり、うどんなんかでも東村山は有名ですから、入間、狭山にこだわらなくてもいいのではと思っているが、どう考えるのか。

吉田文化芸術  
振興課長

そのとおりだと思います。

石原委員

冊子のほかにデータベースをつくるということだが、データベースについて詳しく伺いたい。

吉田文化芸術振興課長 音楽・映画・文学・演劇という代表的なカテゴリーに対して、所沢に関しての歴史や現況を網羅しております。加えて、所沢にかかわった文化人についても、調べた結果を巻末につけようと考えております。

石原委員 観念的なものを質問するが、所沢文化圏の位置づけの第一期が80年代を起点にして、新しくニュー・サバービアという流れだと思う。郊外文化以前のもので郷土の歴史をふくめたところで精神は大事にしていきたいという答弁をいただいているが、音楽活動が盛んな状況が歴史のなかで、どのようにつくられてきたのかを今の文化の担い手である若い人たちも知ったうえで所沢で芸術活動に携わっていただければと思う。どのように発信していくか。

鈴木市民部長 パブリックコメントで大変有効なご意見とご関心をいただいたのですが、ありがたいことにそれ以上に庁内の他部署からも意見が百出しました。市民部としては都市化の流れが始まったタイミングを今回のビジョン策定フレームの黎明期ととらえています。郊外のまちづくりが認識されたところをスタートラインにしていますが、教育関係分野の方にしますと、所沢はもともと中世以前からの歴史があって、そういうものをないがしろにしているのではないか、というわけです。こちらは所沢の都市化のまちづくりが始まったところをスタートラインにしているから、そこは視点が

違うと押し返したわけです。ただ、分野の異なった地点から、ちがった目線で見られることによって足りなかった見方や誤りを修正することができまして、ようやくここまでたどり着いたわけです。

ご質問について、わずか過去30年、40年の分析でこの先の20年をみていこうとしているわけですが、この30、40年の情報化の変化の速度はずば抜けています。情報端末は従来あった一極集中型の情報提供機会ではなくなっています。今では分散ネットワークで、情報は地下化しています。受け手に有効な情報として提示しながら、届けたい情報をきちんと送り届けられるかが絶対原則です。したがって効果的に情報を伝達していく手段としてFacebookやTwitter等を有効活用して、欲しい情報を個人ユーザーに対してもお届けできることを目指しています。

西沢委員

若い人たちにとっての情報の取り方は、個で取捨選択していく傾向がある。長い期間にわたって文化や芸術として継承されるものが、そのような方法で取り込むことや実感することができるのか。環境が変わったというのが本質的なものは変わっていないのではないか。その意味で、はやりに合わせて発信の仕方は違うのではないかと。

吉田文化芸術  
振興課長

デジタルに対して、アナログな情報も必要だと考えています。アナログに回帰するような視点も持たなければなりません。ツールとして増えてい

ることはありがたいことで、有効活用しますが、もともとある手段というものもおざなりにはできません。かつて新宿の風月堂に集まって、文化の語らいがあったように、理想としては、例えば空き家が拠点施設となることなども含めて、情報共有できればよいと思っています。

西沢委員

今の話と前後すると思うが、吉祥寺にミュージシャンが集まっていた時代があって、場を求めて若い人たちがいろいろなところを探していた時代があった。土壌となる若者の生活スタイルというものが、そこにはあったと思う。私の学生時代には友人の家に行き、そこで話をしたり、ギターを演奏したりしていた。その世代のスタイルが前提となって、空き家等が活かされる。前提が変わっているのに提供するものが昔ながらのものというのは危惧するところだ。これについてはどのような考えか。

鈴木市民部長

示唆に富んだ興味深いご指摘です。誰にも多感な時期があって、文化活動を一生懸命やる時期があって、それは今後も同じだと思いますが、そこが自分の文化の中心地になります。ある種の色眼鏡で文化問題をとらえていった場合、大きな過ちを踏むのではないか、というご指摘に聞こえました。先行世代は若い人たちをもろい感性だと見がちだけでも、それが今の文化の特性なら、自分たちの文化とも等価なのです。ただし、人間の五感の感覚器が変わらないならば、同様にやはり人が行為するための場は必要なのではないか。このことは変化することなく存在するものとして感じて



いこうとしています。事実、ビジョン策定の過程で意見交換した中でも場を求める声は多かったですし、今後ともそうした場所設定は重要な要素だと思っております。

大石委員

10年前に比べると文化芸術振興ビジョンができて、所沢のゆとりや誇りを市の政策を通しておこなっていくということで、教育委員会から文化の部分が市長部局に移って、良かったと思う。産官学連携について、大学とはそれぞれ、この10何年で連携が進んできたと思う。KADOKAWAが進出してくることで企業との連携と文化に大きな意味合いが出てきたと思うが、やはり所沢にとっては良くも悪くも西武鉄道は影響が大きいので、文化芸術振興ビジョンの策定経過において、かかわってきたか。これからどのようにかかわっていくか。西武線沿線から人を呼び込むためには必要だと思うが、検討の経過を伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長

文化芸術振興ビジョンについては西武鉄道とかかわりはありませんでしたが、音楽のあるまちづくりについては協力していただいています。空飛ぶ音楽祭のアドバイザーを打診した経過もございます。

大石委員

私はいろいろなところで音響係をしていて、戦国滝の城まつりで音響係をしたり、所沢ひまわり畑コンサートの主催をさせていただいた。野外での音楽活動について、音というのは大切なものだ。所沢とことこタワーま

つりも野老澤町造商店と一緒に私も音響係や企画に参加し、所沢はベッドタウンで生活されている方がいて、音楽を発信することによって、それを騒音と感じる人がいて、一部の人から大きな声でクレームを受けていて、文化活動が制限されてしまう。航空公園の野外ステージも数名のヘビークレーマーによって、非常に使いづらく、音楽・文化活動が制限されている。郊外型の文化を創造していくためには、音楽を騒音と感じる人の対策や制限するのは非常に厳しいが、所沢では屋外型のイベントを日本一の数にするという宣言をしている内容なので、市民の気持ちを醸成していくことが大事だと思うが、策定に当たってどう話し合われたのか伺いたい。

鈴木市民部長

このことについては早い段階から気にしているもので、実際に政策を打つときに避けてはとおれない点検要素です。今年度行う「空飛ぶ音楽祭」にも該当します。公共空間というものは、いろんな方たちが共有していますが、一部の主張をどこまで受けとめていけるか、多様な声や価値観を反映させ、合意を形成しながら、多くの方の望むかたちに近づけることを基本姿勢として取り組んでいきたいと考えています。

大石委員

表現者を呼び込んでいく必要がある。野外ステージが、ある音楽グループの聖地だったり、所沢駅東口のライブスタジオで別の有名バンドが練習していたりということがある。呼び込むためにも、多くの音楽活動があるが、どこに申し込んでいいのか、わかりやすくした方がよいのではないかと。

千葉県柏市や神奈川県川崎市は確立されている。東京都立川市も最近取り組んでいる。市がやっても、民間がやってよいが、わかりやすくしたほうがよい。表現者が来ることによって、おもしろいまちになっていく。ビジョンの策定の中で、どのように話し合われたのか。

吉田文化芸術  
振興課長

イベントの申し込み先などの明確化は心がけていきたいと思っています。イベントごとに民間がやっているもの、市がやっているものとありますので、1つ見ればわかるように示していければよいと考えています。アーティストを呼び込むことに関して、所沢でやることのステータスを上げていかなければならないので、9月に行う「空飛ぶ音楽祭」については、地元ゆかりのアーティストをお呼びして、イベントのステータスを高める意図で企画しております。これをきっかけに所沢でやりたいという気持ちを醸成していくよう心がけていきます。

小林委員

文化芸術振興ビジョンが何をしようとしているか、わからないところがあつたが、所沢の文化状況を洗い出すものということで、行政のなかに文化芸術振興を位置づけようとしていこうとする一歩になっていくのかと前向きに捉えたいと思っている。

各セクション間がかかわりが出てくると思うが、どのように対応するのか。

日大芸術学部や芸術総合高校とのつながりはどう考えているか。

市民の文化活動の会場費用の問題について、空き家の有効活用ということが挙げられたが、空き家の改修等の課題があると思うが、どのように取り組むのか。

鈴木市民部長

3点のご質問でしたが、いずれもつながり方についてのご質問だと理解しました。1点目は各行政内部がどのような協調体制にあるのか、2点目は学校について、今後どのように学校資源とつながっていくのか、3点目は市民文化における利用者としての市民とのつながり方ということです。

市民部はいろいろな部とつながっています。例えば産業経済部とのつながりは強く、産業経済部は観光や商業の現場がありますが、とりわけ数年後に誕生予定のKADOKAWAの「ところざわサクラタウン」は多くの来訪者が来ると想定しています。この多くの方を私どもがもっている文化的資源で市内につなぎとめていきたいという部局間の意見交換が始まっています。このように他部間とも相互に協調しながら進めていくことになることと思います。

次に、学校についてですが、例えばゴールデンウィーク時に「ところざわ学生映画祭」をワルツ所沢で行っていますが、これは学生が作った魅力的なコンテンツをどのように支援し知らしめていけるかという関係です。今までにも各種コンクールやところバス、計画書の表紙に絵を描いてもらったりしていたが、もっとつながりの太いかたちで、学校にとっても業績的価値につながる関係につながっていきたいと思っております。

市民文化活動との関係については、まず、所沢の文化的特性というのは市民文化の中に大きなエネルギーがあるということです。それが滞るようでは困るが、これから利用者はますますふえていくので、地域における場のつくり方の工夫がポイントになると思っています。それについては公民館やコミュニティ担当の行政職員のみならず、地域活動を実践する人々との率直な意見交換を通じて、どうしたら地域の中で十全たる活動ができるのかということについて、主体的にかかわっていきたいと思います。

荻野議員

SNSを含めて情報発信を小まめにしていくということだが、インパクトのある情報発信についての考えを伺いたい。

吉田文化芸術  
振興課長

「空飛ぶ音楽祭」の開催については、刺激のある発表を考えてみたいと思います。

荻野委員

文化芸術振興ビジョンの策定を知る市民が少ないと思うが、ビジョンの周知について伺いたい。

鈴木市民部長

どうしたら市民の皆さんに欲しがっていただけるビジョンになるのかを考えています。日大芸術学部の先生とも話をさせていただいて、持ちやすいサイズやおしゃれなバッグと一緒にすることなども考えています。まだ結論は出ていませんが、視覚的に刺激のあるパッケージにして多くの皆

さんに浸透させていきたいと思っています。

石本委員

ビジョンの中に写真や音楽等の含まれている分野と将棋等の含まれていない分野がある。職員の意見を集約したということだが、含まれていないものについて、いつごろ、どのように最終確認するのか。

吉田文化芸術

すべてを網羅することはできませんので、基本的には現在の案のとおり

振興課長

となりますが、所沢の特色を生かすようにセレクトしています。別冊では本編に含まれていない記述も入っており、この後、内容を吟味してまいります。

**【質疑終結】**

(説明員退室)

植竹委員長

本日審査した特定事件については、審査を終結することよろしいか。

(委員了承)

散 会 (午前11時22分)